

| | |
|------------------|---|
| Title | 田中明教授略歴・主著作 |
| Sub Title | CV of Professor Akira Tanaka |
| Author | |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 2000 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.92, No.4 (2000. 1) ,p.913(251)- 917(255) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20000101-0251 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

田中 明教授 略歴・主著作

*2000年3月31日をもって慶應義塾大学
経済学部を定年退職するのにもない、
本学会を退会する会員の略歴・主著作を
次頁に掲載します。

本誌編集委員会

田中 明教授 略歴・主著作

1999年12月1日現在

学 歴

- 昭和32年3月 慶應義塾大学経済学部卒業
昭和34年3月 同学大学院経済学研究科経済政策専攻修士課程修了
昭和37年3月 同学大学院経済学研究科経済学専攻博士課程修了

職 歴

- 昭和34年4月 慶應義塾大学経済学部副手
昭和36年4月 同学経済学部助手
昭和40年4月 同学経済学部専任講師
昭和42年4月 同学部助教授
昭和47年4月 慶應義塾大学文学部史学科講師（兼任）
～昭和49年3月
昭和52年4月 同学経済学部教授
昭和52年4月 同学大学院経済学研究科委員
平成11年11月 永年（満40年）勤続者の代表として表彰される

主要な業績

- 1 日本「近代化」思想の形成とその構造
慶應義塾経済学会『経済学年報』8, 1965年9月
- 2 明治国家の思想としての「文明開化の特権」について
『三田学会雑誌』70(1), 1977年2月
- 3 「七三一」部隊の研究における中国研究者の動向について
『三田学会雑誌』82(3), 1989年10月（江田いづみ・田中明共著）
- 4 松村高夫・田中明編『七三一部隊作成資料』不二出版 1991年
- 5 江田・小林・田中・和気編訳『細菌作戦－BC兵器の原点－』同文館出版 1992年
- 6 近代天皇制論の理論的諸問題
（平成10年度 塾内研究補助による研究経過報告として）

〔報告の概要〕

筆者の関心は、近代天皇制論の学説史的概説を試みることに在るのでなく、昭和帝政期に生じた天皇制国家の全体主義化に関する実証的研究の前提をなす理論的な諸問題を検討すべく、一九七〇年代ないしは八〇年代中葉における講座派史学系近代天皇制論の著しい分化と対立が齎した、国家論の諸類型を析出しそれらの理論的な問題点を剔抉することに論究の主要な課題が求められる点に注意を促したいと思う。

第Ⅰの類型は、講座派傍流の異端的系譜に属する一九七一年の後藤靖論文に一つの再編された範型をみる。同氏の論説は、国家範疇としての封建国家に形態概念としての絶対主義を同化せしめる理論において、労農派の見地に基きながらも講座派の立場を銜うがごとく、維新の変革により創出された帝国に絶対主義の封建国家を見出す反面、一九一八年を起点とみる「上からのブルジョア革命」を、一九三八年に完成される上からのファシズム体制が完遂するという仮説を唱える点では服部と意見がわかれる。服部之総の天皇制論は、一八九〇年ないしは一九〇〇年におけるボナパルチスムへの移行を想定して、これを「上からの革命」ならぬ上からの「ブルジョア革命」の過程として把握するが、プロレタリアト主導による下からの革命に対置される上からの革命を、「上からのブルジョア革命」と読み替えて「下からのブルジョア革命」の幻を夢みる服部の解釈はマルクス・レーニン主義からの逸脱である。

第Ⅱの類型は、一九七一年の後藤靖論文に対する再度の批判を介して、八〇年代中葉に大石嘉一郎氏が到達した現代講座派の折衷主義的な見解である。同氏の場合は、後進国型の資本主義ないしは帝国主義の国家形態としての、「近代的絶対主義」を封建的絶対主義と区別する視点を把握した結果、封建国家に絶対主義を同化せしめる陥穽から脱却する反面において、いわゆる絶対主義の近代国家としての本質的性格の強調が同時に近代的形態の評価を要求し、「近代的絶対主義」の立憲主義的側面の重視を求める志向を促して、一九〇〇年の政友会成立を画期に以後の統治形態をたんなる絶対主義たらしめぬ理論の展開に道を開くということも避け難いところである。大内氏の連続説を批判して戦前と戦後の両段階の断絶性を強調する余りに同氏が犯した錯誤は、日本の戦後改革に氏もまた「上からのブルジョア革命」の完成形態を認めて後藤靖氏の誤れる「革命」概念を受け容れ日本に対する適用を肯じた点に在る。

第Ⅲの類型は、講座派の異端的ではあるが労農派と本質的にことなる、木坂順一郎氏の一九七〇年代の末葉以後に装いを改めた天皇制論にその典型が見出される。明治憲法下の近代天皇制も、絶対主義ではなく資本主義の国家形態としての立憲主義であるとの仮説を共有しながらも、木坂氏が宇野派に対して有する決定的な相違点は、一九三〇年代に生じた立憲主義から全体主義への政治体制再編に関わる、権力の主体を軍部よりも君主制の政治的な拠点をなす宮廷に見出すという点に求められる。木坂氏の国家論が、一五年戦争期に一貫して政治的主導権を掌握した、国家権力の担い手を宮廷貴族に、しかして、貴族の政治的権力を内より支える天皇の精神的権威、ないしは、絶対不可侵性の観念的培養基を地主制・家族制の共同体的秩序に求める限りは、地主的所有の前近代的ではなく半封建的もしくは封建的性格が、近代天皇制を中欧型の権威的な立憲君主制ともことならしめる識別の論拠をあたえるのである。

総じて言えば、階級独裁が政治の次元における階級同盟の形態に実現せられる、国家の形態は、国家権力が統治機構の固有な形態を介して現れる独自の機能の形態において把握されうる。半封建的地主階級と資本家階級が同盟して後者の独裁を貫徹する天皇制国家の、立憲主義的な機構の形態における絶対主義的な機能の形態としての半封建的な国家形態と、資本家階級がその貴族的分派をなす前近代的地主階級と同盟して前者の独裁を実現する、立憲君主制の中欧的変種たる前近代的な国家形態とを混同せしめる諸説が容認されうる余地はありえないのである。